

NIPPON FOOD SHIFT

「おいしい」の、その前に。

これからの「食」を どう考え、何をすべきか？

消費者 × 農林水産省

おいしいものが当たり前のように手に入り、豊かな食を享受できる今の日本。その当たり前は、今後もずっと続いていくのでしょうか。気候変動、世界情勢の変化など地球規模のものから、少子高齢化など国内問題まで、日本の「食」の裏側には解決すべき様々な課題があります。

これからの「食」はどうか、そのために何をすべきか。「食料・農業・農村基本法」の見直しに向けた議論の環として、3日連続この紙面上で消費者、事業者、生産者の方々と農林水産省の若手職員有志による「チーム2050」の座談会を展開します。思いや意見を交わしながら、20年後、30年後の日本の「食」を考え、あるべき姿を追求します。

食を選ぶ基準は二極化しているのか

加藤 みなさんが食を選ぶ基準はどういうものでしょうか。やはり安いか高いかなのか。あえて生産者の顔が見えるものとか、無農薬や有機農法で作られたものを選んでいたりするのでしょうか。

河瀬 私はSNSや口コミで生産者自身が発信し背景を知った上で応援したい気持ちがある。JAS日本農林規格マークや、適切な飼育環境で育てられた肉や卵などアマルウェルフェア（動物福祉）も気にかかります。

ダイちゃん コンサートには5000円払うのに、キャブ1個に3000円は払いたくない人がいるのは事実。しかし、その3000円のキャブがおいしいことが伝われば買ってみたいと思うようになるかもしれない。そのきっかけづくりが大切ですね。

加藤 安ければいいの、たまた高くて安心できておいしいものを選択するの、消費者の意識は二極化が進んでいるのでしょうか。

笠原 価格を抑えて大量に安定的に生産・供給することは決して悪いことではないはず。一方で、生産者



タレント 加藤 浩次氏

や事業者が工夫を重ねて、食品に様々な付加価値を付けるケースも増えていきます。選択肢が増えることは重要です。農水省としても消費者の色々な考え方に沿って、消費者目線で情報提供することが大切だと思います。



農林水産省 大臣官房 秘書課 監査官 笠原 健

関心な人たちは、何かのきっかけで意識を変えたいという人はあると思います。近年は子どもたちへの食育も行われています。環境に優しい持続可能な農業や栄養機能が強化されている食品に関心を持つ消費者も増えてきているのではないのでしょうか。

朝日 食料の安定供給についても様々な価値基準があります。とにかく栄養がとれればいいという人もいれば、もつとブランド価値のあるものがないという人もいます。安全・安心な食料を安定供給するという使命は最低



フードコーディネーター 河瀬 璃菜氏

加藤 農家はお米や野菜を作るアーティストです。であれば作品づくりに専念させてあげたいという考え方もありますね。画家の描いた絵を画廊が販売するのと同じように、現在の一般的で安定的な流通網以外に、ブランドものだけを供給するような流通ラインを別に作るという考え方もいいんじゃないかな。

朝日 高品質の農作物を生産するプロフェッショナルチームと、販路拡大も含めた管理・経営チームが役割を分担するの、ありだと思えます。天候リスクで量を確保できず別の流通ラインが機能しないこともあり、

ニッポンの食NEXT 座談会 ①

聞きたい 話したい 話し合いたい

食の多様化の時代に 自給率をどう捉えるか

日本の食料の自給率についても



農林水産省 消費・安全局 植物防疫課 生産安全専門官 石川 裕子

J.A. 卸売市場等の流通網も大事です。安定供給のためのリスクヘッジ機能があり、これは生産者だけでなく消費者にとっても歓迎すべきことです。

石川 安価で品質が一定している野菜をスーパーで買えることにJ.A.が果たしている役割は大きい。中には特産品に力を入れて地域の生産者集団として質の高いものを供給できる体制づくりに進んでいるJ.A.もあります。



農林水産省 大臣官房 課長補佐 朝日 健介

朝日 たしかに消費者がずっとお米やお芋ばかり食べている自給率は上がりますが、70年代以降に肉や油の消費量が増えるにつれて、餌や原料となるトウモロコシは輸入依存し、全体としては自給率が下がりました。では、米や芋をもっと食べればいいかという、必ずしもそうではない。

加藤 消費者もそれを求めているわけではなさそうですね。

朝日 日本は、気候や国土面積の条件があるので、どうしても一部は輸入に頼らざるを得ない。重要なのは、輸入も安定的に確保しながら国内の生産装置を守っていくことです。農村から人がなくなると、畑が畑でなくなる。田んぼが田んぼでなくなる事態だけは避けなければなりません。

石川 一方で、数値目標がカローリースの自給率だけでいいの、かというのとも思います。私たちはカローリを摂取するだけでなく、野菜や果物からとれるビタミンなどいろいろな栄養が必要。消費者の意識はもっと多様化しています。

加藤 難しいですね。輸入といつても、日本の国のパワーが衰えれば輸入もできなくなりますが、小ロットだとそれは安くも入れられない。大きなロットだと安く小売をいれられていく。日本のGDPが大きいから輸入できているという面もある。

笠原 安定的な輸入は国としても重要視すべき。輸入先の多角化、相手国との関係をしっかりと作り、もしもの時にも輸入が確保できるようにすることが大切。そうした外交努力も不可欠な時代になっていると思います。

河瀬 私にとってはどんな農作物でも、自分の体に合っているかどうか、大事。自給率を上げるために日本の

米をもっと食べようといわれても、それを自分の体が欲していないなら、なかなか呼びかけにのびません。

加藤 自給率を上げるために消費者としてどんなことをすればいいのでしょうか。

朝日 食料の安定供給についても様々な価値基準があります。とにかく栄養がとれればいいという人もいれば、もつとブランド価値のあるものがないという人もいます。安全・安心な食料を安定供給するという使命は最低

ダイちゃん 料理研究家

人をもっと増やしたほうが、日本の農業の将来を考える上ではいいと思えます。

生まれ、国内で消費できない分は輸出へ。日本の農家は海外に比べていいものを作る力があるし、世界に冠たる農業輸出国になつていけばいいな。そのために、今の生産・流通の基盤を変えて、若い人たちがどんどん参入できるようにしなければ。

河瀬 消費者として食の情報を知りたい。自分の体にどんな栄養が必要か知らなければ、どうやって選んでいいかわからない。食に対して興味をもつ人たちが増えていくことで、農業への関心も生まれる。その一歩目が大事だと思います。

ダイちゃん 今から20年前はスマホなんてなかった。ITの進化はすさまじい。食も同じような進化を遂げるでしょう。効率的に栄養だけを摂れる食品と、反対に個人の選択肢や感性のこだわりを満たす食品と両極化するんじゃないかと思えます。食とは、五感で感じられるコミュニケーションのメディア。単にカロリーを満たすだけでは、豊かな感性をもつ人が増えるのが30年後の食の理想型です。

笠原 食をめぐると環境がどんなに変わってきたとしても、我々農水省としては食料の安定供給をしていくことが最重要。そのために、輸入はもちろんだが国内農業は夢のある産業であるべきであり、現に販売金額5億円を超えている農家も着実に増えている。こうした明るい現状もぜひ皆さんに知ってほしい。

朝日 加藤さんがおっしゃったように、将来は日本で亜熱帯の作物がたくさん採れるようになるかもしれません。

石川 変化に対応しながら食の安定供給の仕組みを作るのが、農水省の大事な役割。まずは知ることが大事だと、河瀬さんもダイちゃんさんもおっしゃっていましたが、知ってもらうためのわかりやすい表示や伝え方をもう工夫しなければなりません。一人ひとりがおいしいと思えてご飯を食べられる環境をこれからも支え続けたいと思います。



写真下段：左から、ダイちゃん氏、河瀬氏、加藤氏、羽生氏（ファシリテーター） 写真上段：左から、朝日、石川、笠原



チーム2050

食料・農業・農村基本法の検証と見直しの検討
「食料・農業・農村基本法」は、様々な政策の方向性を定める指針となるものです。制定から20年を経て、農林水産省では、多くの皆さまからご意見を伺いながら、総合的な検証と見直しに向けた検討を進めています。

農林水産省「チーム2050」
将来の農林水産省の政策を担う若手職員有志による「チーム2050」。今日的な社会課題や国内外の動向を踏まえ、未来（2050年）の農林水産省や施策のあり方について、「自分ごと」として検討に取り組んでいます。

広告

食料・農業・農村基本法、検証中。

食から日本を考える。

農林水産省